

## 東アジアの近代と女性、そして「悪女」

金 多 希

### はじめに

儒教理念に縛られていたかつての東アジアでの女性たちは「良妻」か「悪妻」かの二者択一の生しか生きられなかった。ほとんどの女性は男性が作り上げたあらゆる社会規範、とりわけ「婦道」を立派に守り抜くことによって「良妻」になろうとした。また、そうした女性を社会は積極的に賞賛し、理想の女性像として美化した。しかし、そのような生き方に疑問を抱き、抵抗した人も少なからず存在する。いわゆる「悪女<sup>1</sup>」である。無論、社会はそのような女性たちを厳しく処罰し、儒教規範を壊した手本とした。つまり、「悪女」は「良妻」の価値を高めるために利用されたのである。しかし、近代化とともに入ってきた西洋文化、とりわけ自由恋愛思想に基づいた新しい結婚文化の洗礼を受けることによって女性たちは様々な生を送ることとなる。

本稿では、東アジアの女性たちが儒教の呪縛から脱皮して一人の人間として目覚めていく過程を浮き彫りにする。

### I. 儒教社会を生きる女性たち

韓国をはじめ東アジア諸国は長い間儒教的価値観の中で生きてきた。儒教価値観の中の男女関係は、「男尊女卑」、「女必従夫」という言葉に代表されるように、男は天、女は地、男は陽、女は陰と示す。つまり、夫は妻の天で、天は尊く、地は卑しい者で、夫は絶対のものとして位置づけられた。このような男性中心社会では、女性は美しく、従順で貞節であればよく、才のないのが美德とされた<sup>2</sup>。そして、そのような女性に育てるために、いわゆる「女訓書」といわれる道德教育書、例えば『礼記』（戦国時代）、『烈女伝』（前漢）、『女誡』（後漢）、『女論語』（唐）、『内訓』（明）などが執筆された。これらの書物は女性が儒教的な女性観を自

発的に受け入れさせるために作られたもので、日本や韓国にも伝えられた。例えば、江戸時代の日本では武家や上層町人の家庭に生まれ育った女の子は、結婚前に一人前の女として認められるために必要な婦徳（女として守らねばならない諸徳）、婦言（女としての言葉使い）、婦功（女としての手わざ）を身につけなければならなかった。そのために多数の「女訓書」が出版され、広く読まれていたが、韓国においても同様に、朝鮮時代にたくさん「女訓書」が製作され、女性教育に当てられていた<sup>3</sup>。

### 1. 中国の場合

そこで、長い間東アジアの女性たちを支配していた「女訓書」の中でも、とりわけ『礼記』と『烈女伝』を取り上げ、近代以前の東アジアで行われていた女性教育について考察する。

まず、日本と韓国に大きな影響を与え、東アジアにおける儒教的な女性観の基礎を確立したと評される『礼記』から見ていくことにする<sup>4</sup>。この書物は、儒教的な女性観を紹介した最も古い文献として知られるが、執筆されたのもかなり古く、戦国時代（BC403-221）から漢王朝（BC202-AD220）にかけて行われていたと推定されている。全49編に編纂されているが、その内容は一般的な「礼」の原理から具体的な「葬祭礼」に至るまで幅広い内容を扱っている。また、「男女別有」の原理、「婚姻の意味」、「一夫従事」と「剛柔の原理」、そして「三従の道」と「婦女の行動」など、儒教的な女性観の根幹になる理論をも扱っている。特に「内側」は、「孝」と「男女の倫理」を集中的に扱っているがために、別の用途としても活用されている<sup>5</sup>。

『礼記』の「曲禮上第一」には、「男女別有」に関する基本的な内容が次のように記されてい

る。

男女は一つの席にすわらず、一つの衣かけを用いず、櫛や手拭を共用せず、物を手渡ししない。(中略) 男たちの間の事についての話は、家の門のしきいから内へ持ち込まれず、女たちの話は門のしきいから外へ持ち出されない<sup>6</sup>。

ここでは、男女の同席をはじめ、物の手渡しなど男女の接触を厳密に制限し、男性と女性の区切りを明確に提示している。また、男女を互いに異なる分野に配置し、分別が薄れることを防ぐように命じている。それには、男女が各々家の外と内に位置することを「礼」として規定し、それによって外と内の区分を確実にしておくことで、男女は根本から異なっていることを示している。

また、このような「男女別有」の基本は結婚という大行事にも深く関わり、『礼記』の「郊特牲第十一」には次のように記されている。

天と地と両者の力が合わさって万物が生まれ、育つ。それに似て男女両者の結婚によって子孫が生まれ、栄えて番瀬に続いてゆく。そして結婚には必ず異性をめとることになっているのは、結婚によって、縁の遠い家と近しくなり、かつは男女の別を明確ならしめようとするからである。さて婚礼の始め、女の家になめる幣には誠意をこめ、その口上はできるだけ鄭重にし、話すことは信義に背かない。信義は人に交わる道の根本であり、婦道の根本でもある。婦人は、一たび婚礼をあげて夫と牢肉を共にしたからは、一生心を変えず、夫が死んでも他に嫁ぐことをしない<sup>7</sup>。

天地万物の発生の順次から異性の結婚を正当にする根拠として「男女別有」の重要性が述べられている。しかし、結婚で重要である「信」を強調しながらも、女性の再婚を規制する「一夫従事」を定めていることが分かる。これは「信」から「節」に変容されたことと見なされ、女性に貞節を求める基盤となり、男女の区別から女性に対する差別的な様相に展開している。

さらに、「郊特牲第十一」には、女性の生について下記のように述べている。

親迎の際、女の家の方門を出てからは前の車に乗り、先だつて進み、女の方はあとになってゆくが、夫婦の道はこの時から始まっている。即ち婦人は人(男)に従うもので、幼くしては父兄に従い、嫁してからは夫に従い、夫が死んでからは子(息子)に従うものである<sup>8</sup>。

ここには「三従の道」として広く知られている女性の従うべきことが詳細に書かれている。女性は幼い頃は父兄に従い、結婚後は夫に従い、また、夫が亡くなったら息子に従うべきであり、それ以外の女性の人生は主張できないように示されている。『礼記』には、女性は本来他人に服従する者として定めており、女性には自主的に行動する本分がないことを提示し、受動的に行動することを強要している。

以上のように、『礼記』には女性が守らねばならない様々な教えが記されており、それが後に日本や韓国に広がり、女性を縛る手引きとして多く用いられるようになったのである。

次に、儒教的な女性観を本格的に扱った『列女伝』を見ていくことにする。この書物は、女性の内助を概念化した「女訓書」として評価されている。前漢王朝(BC206-8)の劉向(BC77-6)が著述した中国最初の伝記集である『列女伝』は、中国の古代文献に登場する100名余りの女性の物語を伝記形式でまとめたものである。

全7巻に構成されているこの書物は、女性のイメージと徳目によってそれぞれ「母儀伝」、「賢明伝」、「仁智伝」、「貞順伝」、「節義伝」、「辯通伝」、「孽嬖伝」の7種類の女性像に分けて描かれている。その内容を見ると、「母儀伝」は内助の功が認められる模範的な母親である女性、「賢明伝」は事理をわきまえる賢明な妻、「仁智伝」は賢い女性、「貞順伝」は礼と信義を重視した女性、「節義伝」は夫に対する節操や道徳的義理を実践した女性、「辯通伝」は弁論が優れる女性、「孽嬖伝」は淫乱な言動で国と一族を滅ぼした女性が紹介されている<sup>9</sup>。儒教的な女性を求める徳目と理想的な女性像を表している6つの物語に対して、警戒するべ

き女性像として「孽嬖伝」が最後に掲載されている。このような内容である『列女伝』についてチョン・ジェソは以下のように述べている。

『列女伝』には、劉向が儒教的な女性像を確立するために悩んだ痕跡がよく表れている。賢い母親と妻のイメージを強調するかと思えば、礼と規範に縛られて人間の自然的な欲望を持たない女性を賛美したり、夫と息子を助けるために詭弁を弄する女性の能力に驚嘆したりする。一方男性を誘惑し、国と一族を破滅するような不穏な存在として女性を批判する<sup>10</sup>。

『列女伝』には儒教規範を守る様々な女性を取り上げられているが、この書物の最大の目的は「良い女」と「悪い女」を明確に区別し、儒教的な理念に相応しい理想的な女性を作ろうとしたところにある。

前述の『礼記』が、儒教規範をよく守る「善なる女性」について述べられているのに対して、『列女伝』は、『礼記』に属さない女性、すなわち儒教の規範を守らない「悪なる女性」を最後の節に付け加えることによって女性を判断する基準にしているところが特徴である。「悪女」の典型として知られる末喜について描かれたところを見ると、

末喜とは、夏の桀の妃である。容貌は美しかったが、徳に欠け、邪まで道に外れ、女子の身で丈夫の心を持ち、剣を佩き、冠を戴いていた。桀は礼と義を打ち棄てて、婦人に溺れ、美女を求めて、後宮に積み、(中略)末喜を膝にのせ、その言うことは何でも聞き入れ、惑乱して道を失い、驕奢の限を尽くした。(中略)頌にいう、「末喜桀に配し、維れ乱にして驕り揚がる。桀既に無道、又たその荒を重ぬ。姦軌を是れ用い、常に法るを恤みず。夏後の国、遂に反って商と為る<sup>11</sup>。」

と、末喜という女性は美しいが、徳に欠けていたがために王を誘惑して国を滅ぼした否定的な女性として描かれている。つまり、女性の美貌と性は

家庭や国家の興亡の原因になると論している。それゆえに『列女伝』には、末喜のような「悪女」、「淫女」、「傾国の女」にならないために、また作らないために儒教規範を認め、それを厳しく守るために生きた女性たちの逸話が沢山紹介されているのである。すなわち、中国の女性たちは、『礼記』や『列女伝』などを読みながら、儒教社会に相応しい女性になろうと努力していたのである。

## 2. 日本の場合

女性たちの手本となる生き方を集めた『礼記』や『列女伝』は、日本や韓国でも広く読まれるようになったが、その実態はどういうものであったのだろうか。

日本に『礼記』と『列女伝』が伝わったのは古代にまで遡ることができるが、民間一般にその内容が広まったのは武士階級が支配していた江戸時代である。戦国時代(1493-1573)を経て江戸時代(1603-1867)に入りながら形成された日本の武士階級は、禁欲的な儒教的倫理を基盤として独特の精神文化を創り出し、厳格な家父長制である「男系長子相続制」を定着させた。後に明治民法に採用される家族制度の基になるこの制度は、「男尊女卑」が強まり、「三従の道」が説かれることで、性倫理的な面での女性に対する差別が著しく見られた。武士の娘の処女性が尊重され、夫と死別した女性は『礼記』の教え通りに「貞女二夫にまみえず」の貞操観念に縛られ、事実上の再婚は禁じられた。男性に対しては婚外性関係が許され、側室を置くことが普通であったということを考えると、道徳的にも制度的にも女性には不利であった。また、江戸時代の封建制度は「家門」とともに女性の差別が存在し、江戸時代中期から明治時代にかけて日本女性の教育に広く用いられた教訓書として知られる『女大学』にもそれは如実に表されている<sup>12</sup>。

婦人は別に主君なし。夫を主人と思ひ、敬い慎みて事うるべし。輕しめ侮るべからず。都て婦人の道は、和らぎ従うにあり。夫に対するに、顔色・言葉づかい、慇懃に謙り遜讓べし。不忍して不順なるべからず。奢驕りて無礼なるべからず。是れ女子の第一なる務め

なり<sup>13</sup>。

これは、1880年に刊行された『新撰増補女大学』であるが、ここでは夫に対する妻の言動を注意している。注目すべきは、夫を主人と呼ばせることによって男性への絶対的な服従を強調していることだ。「主人」という呼び方は中国や韓国にはあまり見られない現象である。それだけ日本の女性の地位が低かったことを意味しているが、次の貞操を強調しているところは中国や韓国と変わらない。

諺に曰はく、貞女、両夫にまみえず。と、およそ、女たるものは、一たび、夫の家にとつかば、これをわが家とおもひて、舅姑に、孝養をつくし、身の終はるまで、善く、夫に事ふべし。たとひ、いかなることありとも、あらためて、他人に従ふべからず。これを、貞操といふ。貞操は、女の道の第一なり<sup>14</sup>。

これは嫁いだ女性の行動を論ず箇所であるが、女性の貞操観念を強調するなど、前述の『礼記』や『列女伝』の影響を強く受けていることが分かる。

### 3. 韓国の場合

一方、韓国の朝鮮時代は国家の理念として儒教思想を取り入れていたので日本より徹底的な儒教社会であった。それゆえに朝鮮時代の女性は、『礼記』の教えである「三従の道」の理念が強要され、妻の夫への服従は当然なこととされていた。さらに、韓国ではその儒教規範に外れた女性は「七去の悪」が適用された。

「七去の悪」とは、婦人が離婚される七つの条件、すなわち「不順舅姑去」、「無子去」、「淫去」、「妬去」、「有惡疾去」、「口多言去」、「竊盜去」を指す<sup>15</sup>。この七つのうち一つでも該当すると、女性を家から追い出すことが可能である。したがって、女性は婚家から追い出されないよう耐え抜くことが何よりも重要視されたが、「七去の悪」の中で最も強調された項目は「妬去」であった<sup>16</sup>。

朝鮮後期の学者である宋時烈（1607-1689）はその著『戒女書』（1653）において、嫁入りした

女がもっとも慎むべき行動として「妬去」を第一に挙げているが、その理由は円満な家庭を維持するためであると述べている<sup>17</sup>。

また、韓元震（1682-1751）は、『南塘集』（1712）の中で「妬去」について以下のように述べている。

婦人には七去の悪があり、嫉妬はその中の一つである。嫉妬というものは婦人にとって最大の悪徳であり、聖人が極めて恐れたものである。それは心に芽生えてはならないもので、それを犯す者は容認されない。まして陽は一つで、陰は二つであるのが天道の「常然者」であり、女たちが一人の夫を崇めるのは人事の「当然者」である<sup>18</sup>。

「七去の悪」は、あくまで女性にとって不利な制度であったが、とりわけ嫉妬をする妻は許されなかった。男性たちは、一夫多妻や畜妾制度に守られて自由な性を楽しみながら、女性には一人の夫にのみに仕えるように強要している。完全に男性本位の制度であり、夫の権利を思いのままにしようとする独善的な習慣なのである。しかし、長年の間女性たちはこの体制の下で、それが至極当然であるとのみ思い込んで生きてきたのである。

以上のように、中国と日本、そして韓国では、女性の教育として「女訓書」が用いられていたばかりでなく、むしろそれを積極的に取り入れられていた。その結果、中国はともかく韓国には烈女碑が津々浦々に散在した。日本でも夫に限らず従順な女性や夫のために自分を犠牲にする女性、自分を犠牲にしてまで貞操を守る女性が賞賛され、尊敬の対象となった。また、国もこういう女性を探し出して賞賛し、他の女性の規範としていたのである。

## Ⅱ．儒教体制をはみ出した女性たち

『列女伝』の巻一から巻六に紹介されている女性たちを見る限り、近代以前の東アジア社会では「婦道」を守った女性は国の賞で存在となる。しかし、如何に国が賞賛し、人生の規範として烈女、貞女、節女を作っても、そこからはみ出した人たちも存在した。

## 1. 中国の「悪女」たち

『列女伝』の巻七に取り上げられている「末喜」、「妲己」、「褒姒」などは典型的な「悪女」と名指されているが、彼女たちこそまさしく「はみ出し者」である。とすると、近代以前の東アジアの女性、婦道を立派に守った女性と、そこからはみ出した女性、すなわち「良い女」か「悪い女」かのどちらかに分類されることになる。無論、圧倒的に多かったのは「良い女」である。しかし、「良い女」は「悪い女」なしには存在しないのを『列女伝』は如実に物語っている。そこでここでは、儒教体制をはみ出した女性たちに焦点をあわせて彼女たちが如何にして「悪女」に作られたのかについて見ていくことにする。

前述したように、『列女伝』には他の女性たちの模範となる女性たちがいる一方、他の女性たちの警戒となる女性たちもいる。後者の女性たちは「悪女」、「淫女」などと呼ばれるが、一方では国を傾けるほど美人だということで「傾国の女」とも言われる。その中でもとりわけ「悪女」と名高い楊貴妃（719-756）を取り上げて見る。

楊貴妃は中国第一の美女といわれ、唐王朝の玄宗（685-762）とのロマンスは日本でもなじみ深い<sup>19</sup>。四川省の役人の娘として生まれた彼女は、開元28年（740年）に玄宗の目に入り、貴妃の位についた。絶世の美女と称賛する玄宗は、彼女のために自ら金のかんざしや首飾りを着け、エメラルドを敷き詰めた豪華な浴槽を作るなど盲目になっていた。また、寵愛を受けた彼女は皇女と同じ待遇をうけ、さらに、従兄である楊国忠は宰相になるほどであったと言われている<sup>20</sup>。中江克己は、このような状況について、玄宗が、楊貴妃の欲望を満たすために多くの犠牲を払うことを意に介さず、彼女によって骨抜きにされ、政治のことは顧みなくなっていたと述べている<sup>21</sup>。

楊貴妃に対する玄宗の寵愛について、村山吉廣は玄宗と楊貴妃の愛の歌である白居易（772-846）の「長恨歌」に、次のように記されていると述べている。

春宵苦短日高起  
しゅんしょうみじか　くろし　ひたか　おき  
春宵短きに苦しんで日高くして起き  
従比君王不早朝

こ　これより君王　くんおう　そうちょう　早朝せず

承　承　承  
かん　う　えん　じ　かん　か  
飲　承　宴　に　侍　して　閑　暇　なく

春　春　春　春　春  
はる　はる　あそび　したが　よ　よ　もつぱ  
春は春の遊に従い夜は夜を専らにす

後　宮　佳　麗　三　千　人  
こうきゅう　かれい　さんぜんにん  
後宮の佳麗　三千人

三　千　寵　愛　在　一　身  
さんぜん　ちやうあい　いっしん  
三千の寵愛　一身にあり<sup>22</sup>

この歌は、楊貴妃に惚れて政治を後まわしにしている玄宗の様子を描いている。楊貴妃に対する玄宗の寵愛は「三千寵愛在一身」から伺えるように、国の衰退をもたらし、安史の乱（756-763）を引き起す原因となった。結局、楊貴妃は「すべての元凶は、楊貴妃のおかげで贅沢三昧をし、おごりたかぶった楊一族である」、「帝を惑わした張本人」であると、安史の乱の責任を問われ、玄宗に縊殺刑にされた<sup>23</sup>。現代において彼女は、美人の代名詞として、また国を傾けた女性として、中国をはじめ世界中に知られているが、玄宗を聖王に導く賢婦ではなかったことから、儒教体制からはみ出した女性といえよう。

## 2. 韓国の「悪女」たち

ところで、韓国にも楊貴妃に匹敵する女性が歴史上に存在する。張禧嬪（?-1701）である。朝鮮王朝の第19代の肅宗（1054-1105）の後宮から王后にもなる彼女の逸話は、韓国では1961年に映画化されて以来、最近まで繰り返し映像化されている<sup>24</sup>。

チョン・ドウヒによると、肅宗の王后であった仁顯王后（1667-1701）は、張禧嬪について、「女官張氏侍奴が後宮に参詣し、禧嬪と封じられ、悪賢くて敏捷慧黠で上意を迎合し、主上は非常に寵愛した。」と述べている<sup>25</sup>。肅宗は張禧嬪が生んだ息子を庶子であるにもかかわらず皇太子にして、仁顯王后を廃位した後、張禧嬪を王后にした。それは、党派争いが激しかった当時の状況で西人派が追い出され、南人派が権力を握ることを意味することでもあるが、仁顯王后の復位を計る西人派は、仁顯王后の廃位を後悔する肅宗と意気投合し、王后にあげた彼女を降格する。しかし、復位

した仁顯王後の死後、巫女を利用して呪ったことが原因で王后が亡くなったという密告に押されて、誣告罪という名目で賜死させる。「肅宗実録」(1701年10月8日)には、張禧嬪の賜死について「宗廟社稷と皇太子のために、後日、悩みの種をあらかじめ除去するべき。」と述べている<sup>26</sup>。彼女の息子は、その後王位を継ぎ景宗(1688-1724)になるが、彼女は党派の激しい争いの中で国家と王室の安寧のために犠牲になったと考えられる。

宮中を血まみれにした張禧嬪のことは、当時大きな話題となり、「せりは四季であり、花をつける茎は一時期である。」という歌が民衆に広まった<sup>27</sup>。また、仁顯王後の廃位に反対で流刑された金萬重(1637-1692)の『謝氏南征記』によってその話は再現された。この作品について李在銑は、仁顯王后を追い出して張禧嬪を宮廷に入れた肅宗の気持ちを変えさせようとしたという説もあるが、『謝氏南征記』に登場する喬氏は「七去の悪」も顔負けの悪の頂点に立つ女で韓国文学史における代表的な悪女であると主張している<sup>28</sup>。韓国の家庭小説の代表となるこの小説の内容を簡略して述べると、中国明時代の劉翰林は淑徳と才学を兼ね備えた謝氏と婚姻するが、9年がたっても子がなく、喬氏を側室にする。奸悪で猜忌心が強い喬氏は奸計をめぐらし、謝氏を追い出して正室になる。また、喬氏は情夫と密通し、夫を政府に謀略し、流刑させた後、全財産を持って逃げるが、強盗に遭い窮地に陥る。一方、夫の劉翰林は疑いを晴らし、謝氏を再び迎えて、喬氏を罰する<sup>29</sup>。

金萬重は、古代文学の勧善懲悪をもとに『謝氏南征記』を通して、仁顯王后を謝氏に、張禧嬪を喬氏に例え、当時の状況から皮肉を言った。このように、国を揺るがした張禧嬪は、当時社会の受け入れることのできない「七去の悪」の嫉妬と女性に関与を禁止する政治関係の絡みが生み出した儒教体制からはみ出された女性、「悪女」であると言えるだろう。

しかし、このような「悪女」は王室に限ったものではなかった。1480年10月18日の「成宗実録<sup>30</sup>」には、於乙于同(?-1480)という女性を絞首刑にしたと記録し、その理由として11名の男性と縁を結んだ関係を詳細に説明している<sup>31</sup>。彼女は名門家の娘として生まれ、宗室泰康守の妻

になったが、下男と話す場面を夫に目撃され、「七去の悪」の中の「淫去」、また「無子去」にあたいするという名目で夫に追い出される。彼女はその後、下男から高官大爵に至るまで数十名の男性と枕を共にし、その結果、放蕩な生活で社会的物議をかもした女性として鞫問され、いわゆる姦通罪で死刑に至った<sup>32</sup>。ノ・フェチャンは彼女について、「於乙于同は、まるで1990年代アメリカの最も自由奔放な夫人ができることを500年前にやり遂げた。相手の身分を問わずに気に入った人なら直ちにその場で本能的な行動をした。」と言っている<sup>33</sup>。

於乙于同は当時、支配層である両班の女性であったが、「七去の悪」によって結婚生活は破綻し、また、その後も「再婚禁止法」に縛られているような社会的状況で、自由と本能に充実する生き方を選んだと考えられる。しかし、疎んじられた女性に要求される「自決」を行わなかった彼女は、社会秩序と家紋に反抗する。つまり、儒教体制からはみ出したがゆえに世間の非難を浴び、風紀を乱したとされ、罰される。しかし、彼女と関係を結んだ男性は罰されることはなかった。於乙于同事件は、朝鮮王朝の実録に記されるほど社会に大きな反響を起こしたが、結局、この事件は、他の女性が決して真似してはいけない警戒の手本として片付けられた。

### 3. 日本の「悪女」たち

一方、日本においては、「悪女」として北条政子(1157-1225)、日野富子(1440-1496)、淀君(1569?-1615?)などが取り上げられている。しかし、中国や韓国の「悪女」たちに比べて、彼女たちはいわゆる「悪女」としての認識が薄く、同様には扱い難い。なぜなら、これまで国を傾けるほどの美貌の女性、あるいは、男性を踏み台にして出世を目指す女性、淫乱で自由奔放な生き方をする女性などの否定的な面が強調されている「悪女」たちと見做せないからだ。すると、日本には「悪女」と呼ばれた女性は存在しなかったのだろうか。必ずしもそうではなく、日本の長い歴史には少なからずの「悪女」が存在していた。

そこで、「悪女」を論じる際、最もそれに相応しいと言われている孝謙天皇(のちの称徳天皇)

(718-770) を取り上げたい<sup>34</sup>。孝謙天皇、すなわち称徳天皇は、女性としてはじめて皇太子になり、二度（第46、48代）も皇位についた、日本歴史上最も輝かしい女性である。と同時に、日本歴史上最高のスキャンダラスな女性としても知られている<sup>35</sup>。それについて、田中貴子は以下のようなことを述べている。

称徳天皇は、古代天皇のうちでもまれに見る醜聞の持ち主であった。未婚の天皇である彼女が、えみのおしかつ恵美押勝（安部仲麻呂）や道鏡との愛欲に溺れ政治を私物化した、という認識は今でもまかり通っている。しかも、道鏡は「巨根」で知られる逸物の持ち主である。対する称徳天皇は「広陰」だったので彼をことのほか寵愛したという説が（中略）奈良時代には六人八代の女帝が出ているが、これほど悪評を立てられ、それが現在でも根強く残っているのは称徳天皇ただ一人といってよいだろう<sup>36</sup>。

つまり、称徳天皇は女帝という地位と権力を利用して法相宗の僧である道鏡（700? - 772）を寵愛し、挙句の果てに政治的困難を招いた悪女なのであった。次の文は、二人のスキャンダルについて「天の下の国」、すなわち国民が歌ったものである。

法師らもばを裾着きたりとあなづ軽悔れど、そが中に腰帯こもつち・薦いやす懸れるぞ。弥や発つ時々、畏き卿や。（坊さんたちを、女みたいに裳をはく奴らとさげすんでいるが、裳の下には石帯や陽物が下がっているのだぞ。それがいきり立つと、それは恐ろしい型なんだぞ）

話が黒み、そひ股に宿たまへ、人となるまで。（私の黒川の陽物を股にはさんでおやすみなさい、お上も女性の体をお待ちでしょうから、一人前になられるまで）

正に木の本を相れば、大徳食し肥れてぞ立ち来たる。（まさしく木の本を見れば、道鏡大徳が食い太ってやって来る）<sup>37</sup>

これによれば、称徳天皇は寵愛した道鏡と権力

を握り、その力をますます強めていった。つまり、愛欲と権力が結びつくことによって政治的な混乱を招いてしまったのである。このことが原因で、称徳天皇は年甲斐もなく色に狂った「淫乱な女帝」として、道鏡は天皇の座を狙った「天下の大逆賊」として社会的に広く非難されただけではなく、850年後の明正天皇まで女帝は現われることができなかった<sup>38</sup>。

以上、中国と韓国、日本において「悪女」と名高い女性たちについて見てきたが、彼女たちはいずれも美貌と性的魅力、そして権力で男性を引き付け、男性を自分に縛り付けることでその人生を狂わせ、ついには不幸に陥れている<sup>39</sup>。いわゆる「悪女」であるが、問題は彼女たちが「悪女」と名指されて処刑になった理由である。なぜなら、彼女たちは儒教規範に反したが故に「悪女」とされているからである。韓国の張禧嬪と於宇干同は「七去の悪」の中でも最大の悪徳と規定されている「嫉妬」と「淫乱」な行為をしたために、中国の楊貴妃はその美貌と性的魅力で王を自分に引き付け、政治をおろそかにさせたためである。しかし、相手の男性は誰一人として罰せられていない。なぜなら、「七去の悪」をはじめ「婦道」を作ったのはほかならぬ男性だからである。

儒教社会の男性たちは、一夫多妻や畜妾といった公的な制度を作って自由奔放な生活を送るかたわら、女性たちには婦道を強要し、それを守った女性は理想と化され、賛美の対象にしたが、そうでない女性は徹底的に社会から排除した。その結果、ほとんどの女性は父や夫に代表される男性に従順な女性になった。しかし、ほんのわずかではあるが、男性が作り上げた儒教規範に矛盾を感じ、抵抗を挑んだ女性たちがいたのは『列女伝』の末喜、妲己をはじめとして楊貴妃、張禧嬪、於宇干同、称徳天皇らの記録がそれを証明している。そして、こうした記録が残っているのは、その中に、むしろ当時の女性の生の姿を求めているのではないかと思われるのである。

### Ⅲ．近代化と女性

#### 1. 儒教制度と女性の発見、そして自由恋愛

1840年、アヘン戦争にはじまる東アジアの開港は、それまでの東アジアの人々の価値観を根底

から覆した。押し寄せてくる社会的文化的背景とまったく異なる西洋文化や文物に、東アジアの人々は時には困惑し、時には驚きながらも、結局その波に身をさらすことになった。東アジア各国は制度から技術、思想、日常生活に至るまで様々な西洋文化と文物を取り入れながら古い封建社会からの脱皮を行いはじめた。

しかし、何千年に渡って東アジアの人々を支配していた儒教的価値観から完全に抜け出るのは難しく、実際に知識人の間では古い価値観を完全に捨て切れない状態で新しい価値観を受け入れたがために、両者の間で悩み、古い価値観を捨て切れない自分に嫌悪感すら抱くものも少なくなかった<sup>40</sup>。そうした知識人を中心に、近代化を推し進める前にまずその障害となる封建制度からの脱皮を強く意識するようになった。そして、彼らは近代化のために打破せねばならぬものとして封建的な社会経済体制と身分制度、封建的な家族制度と因習などを挙げたが、とりわけ克服せねばならない代表的な因習として、個人の自由を拘束する儒教的な家族制度を取り上げ、その批判を行った<sup>41</sup>。

中でも、儒教の影響が強かった韓国や中国では新文化運動をリードする知識人を中心に早婚や男尊女卑、孝、長幼の序の問題などを封建制度の悪しき遺産として批判したが、その過程の中で女性の置かれた現状が浮き彫りにされた<sup>42</sup>。

前節でも見てきたように、東アジアの女性たちは儒教的家族制度の中では最末端に位置する存在であった。独立した人権がまったく認められず、男性によって生涯その生活が決められるという状態が長く続いた。そのことについてようやく意識するようになった知識人たちは、何よりもまず儒教的ヒエラルキーの末端として長い間虐げられてきた女性たちを、その呪縛から解放してやる必要性に迫られた。

まず、その端を切ったのが中国であった。中国では女性の足を大きくしないため、子どもの時から親指を除く足指を裏側にまげて布で固く縛り、発育を抑えた纏足という悪しき風習があった。それが、「男女平等」、「女権」などの欧米の思想が入り、社会改革の要求として女性解放運動に火がつけられ、纏足反対運動が起きた。当初は外国人キリスト教宣教師たちが中心であったが、また

たく間に知識人や女性活動家たちにも広まった。1883年、康有為は広東に夫纏足会を創立し、それをうけついで譚嗣同・梁啓超らは1897年、不纏足会を設立した。これらの運動によって、長い間苦しめられた悪しき風習から女性たちは解放される契機を作った<sup>43</sup>。

韓国では、1888年、開化派の旗手として知られる朴泳孝が畜妾禁止と「若い後家には再婚を認めよう」と主張したのを契機に女性解放運動に火がついた<sup>44</sup>。1894年の甲午改革の際には社会制度として早婚禁止、再婚の自由が立法化された。この一連の法律の制度化によって、韓国の女性たちは長い間縛られていた封建的結婚制度から解放されることができた。

このように、韓国と中国では1880年代に入ってから始まった儒教的家族制度への反発を契機に女性への関心が高まった。いわゆる女性の発見である。女性自身も、この新しい生き方に戸惑いながら、それらを積極的に受け入れはじめた。

とりわけ、女性たちを引き付けたのは若い男女の自由な交際と恋愛、そして女性の社交の自由であった。彼女たちはこの新しい結婚風俗に異質さを感じつつも、自分の意思で配偶者を選ぶという斬新な行為に魅力を感じずにはいられなかった。

そもそも近代以前の東アジアには「恋愛」という言葉は存在しなかった。「恋愛」は19世紀末、西洋の文物や文化の受容に積極的であった日本が、それまで男女間の思慕の感情を表していた「色」や「情」や「恋」といった言葉に対する新しい概念として取り入れ、1880年代末に英語のLoveを翻訳した新造語である<sup>45</sup>。この新しい言葉が、朝鮮や中国に受容され、儒教の影響下にあった東アジア社会の結婚観を根底から覆したことは周知の事実である<sup>46</sup>。当然ながら、東アジアの女性たちはこの新しい風俗の虜になった。

例えば、日本の与謝野晶子(1878-1942)は女性の自由と平等を恋愛に転換させて、積極的に実践した代表的な女性である。彼女は詩集『みだれ髪』(1901)を通じて浪漫的な恋愛至上主義的な世界を目指し、その恋愛至上主義には女性自らが内面的な自我を確立すべきであるという意味が込められている<sup>47</sup>。

また、韓国の金一葉(1896-1971)は1921年『東



亜日報』に「近來の恋愛問題<sup>48</sup>」という記事を掲載し、自由恋愛を消化するためには伝統的な觀念から脱皮することが重要であると主張し、新しい女性の「自由恋愛論」や「新貞操論」は、結局は「自分」のための意志の表現にほかならず、自由恋愛は人間の自由を拘束する旧い道德と伝統的な社会規範を否定するものであると述べた<sup>49</sup>。

しかし、新しい女性たちの自立は決して容易なことではなかった。彼女たちは旧い結婚制度を破り、自由恋愛による新たな結婚制度を定立しようとした。だが、早婚制度をはじめ伝統的な結婚制度の壁があまりにも高すぎた。

例えば、1920年代の当時の韓国では中、上流階級の家庭では息子が10代半ばになると、年上の女性と結婚させて早めに跡継ぎを儲ける習慣がいまだに根強かった。当然ながら、新しい教育を受けた男のほとんどは妻子をもつ既婚者であった。それに対して、新しい女性はほとんど未婚であったがために、彼女たちは自分に見合う恋愛相手や結婚相手を既婚者の中で選ぶしかなかった。新しい女性の中に妾や後妻になったのが多かったのは、新しい女性にとって伝統的な結婚制度の壁がいかに高かったことを物語っている。これを象徴する事件が1926年に起きた。

1926年8月5日付『東亜日報』には「玄海灘激浪中に青年男女の情死<sup>50</sup>」という記事が掲載された。情死したのは音楽家尹心恵（1897-1926）と劇作家金祐鎮（1897-1926）であった。新聞記事は、二人が下関から釜山に向かう関釜連絡船徳壽丸から「互いに抱き合って」玄海灘に身を投げたと書かれているが、実際は目撃者も遺書や遺体もなく、荷物だけが残されていたと伝えている。

これは、韓国はもちろん日本でも大々的に報道された。ジャーナリズムは、情死と断定し、次々と推定の記事を掲載した<sup>51</sup>。それによれば、二人が出会ったのは、尹心恵が日本の東京音楽学校に在学していた1921年の夏休みである。当時、早稲田大学英文科に通っていた金祐鎮は、実は、故郷に妻と子がいる既婚の男性であったが、二人はすぐに恋に落ちた。しかし、二人の恋は未婚女性と既婚男性という社会的に決して許されない不倫であった。それゆえ、二人は愛情と倫理の間で苦しみ、結局玄海灘に身を投げることによって世

間を騒がした不倫の恋に終止符を打ったが、社会に与えた影響は計り知れない。注目すべきは、世間はこの事件を新しい女性の虚栄であると厳しく非難したのである<sup>52</sup>。

このことは、当時の新しい女性にとって結婚問題は避けては通れない、あるいは克服せねばならないことを最大の関心事であったということの意味する。

以上のように見てくると、東アジアの女性たちは19世紀末、新文化運動のリーダーたちが始めた女性解放運動によって、それまで長い間、自分たちを縛っていた儒教の呪縛から解放されるきっかけをつかんだ。韓国や中国、日本の女性たちは古い風習や生き方から逃れるために西洋の新しい結婚文化や自由恋愛風習を積極的に取り入れた。しかし、現実と理想の壁は高く、新しい女性はしばしば非難や揶揄、風刺の対象とされた。

## 2. キリスト教宣教師と女性教育

近代以前の東アジアの女性たちは男性に従順な女性として育てられた。それゆえに東アジアでは長い間「悪妻」や「悪女」は生まれる余地のない社会であった。無論、これまで見てきたように「悪妻」や「悪女」は歴然と存在するが、近代以前の女性教育はあくまで一人の人間としての女性の個性や人格を尊重したり、感情の解放を優先したりするようなものではなく、男性側が作り上げたシステムを充実に遂行する人間を作ることが最大の目的であった。

しかし、開国とともに西洋から自由・平等思想が伝えられ、これまでの男尊女卑に基づく「女訓書」式教育内容に疑問を抱く人々が現れはじめ、女性教育は新たな時代を迎えることになった。その口火を切ったのは外国人キリスト教宣教師であった。

まず中国から見て行くと、アヘン戦争によって開国を余儀なくされた中国には西洋から新旧キリスト教の各宗派の伝道師が多く送り込まれた。彼らは布教達成のためにも中国女性の解放の道を開いた。女性たちの劣悪な家庭生活や不平等な社会は、欧米の市民社会を経験した宣教師たちの眼から見ると、纏足、女性の赤ん坊の間引き、親が決める婚姻制度など解決すべき問題を多く抱えてい

た。彼らは聖書を読ませるために識字教育を、さらに職業教育、また都市では音楽や体育、外国語など近代的な教育も始めた<sup>53</sup>。中国初の女学校として知られる寧波女塾が、1844年にイギリスのキリスト教団体の支援のもと、アルダーシー女史によって設立されたことは周知の事実である。こうしたキリスト教宣教師たちの活動は、当然ながら新文化運動を展開していた梁啓超（1873-1929）や康有為（1858-1927）など知識人に大きな影響を及ぼし、女性教育に関する議論が次々と提唱された。中でも、梁啓超は1897年に『時務報』を通して女子教育の重要性を論じた「女学を論ず」、「女学堂を設くるを倡うの啓」などを発表し、当時の女性たちに大きな影響をもたらした<sup>54</sup>。また、『女子世界』に掲載された「論復女権必以教育為予備」という論説には、教育と女権の関係について次のようなことが指摘されている。

女性が学識と道徳のある者になるためには教育以外はなにもない。教育は女権を回復するための予備的条件である。（中略）（一）先に教育を興せば、その後、女子の能力は強くなる。凶暴で専制的な男子がいても、女性を束縛し、抑え付けることができなくなる、女権が広められる。（二）先に教育を興せば、その後、女子の見解が深くなる。元気がなく、弱弱しい男子がいても、女子を引きつけ、侮辱することができなくなり、女権が男子の権利と平等になる。（三）先に教育を興せば、その後、女子の交際能力は向上する。（中略）（四）先に教育を興せば、その後、女子の公德心が高くなり、顔色が柔らかになり、心が落ち着く（中略）（五）先に教育を興せば、その後、女子は「大義（大きな道理）」を知る。（中略）（六）先に教育を興せば、その後、女子は上手に知人を選び、自由な結婚を決定できる。（1905年2巻3期<sup>55</sup>）

このような主張が、女性の権利を向上することはもちろん、これまで男性に縛られていた女性たちをその呪縛から解放してやる契機となったのは言うまでもない。

一方、日本ではヘボン夫人の女塾と婦人宣教

師メリ・キッターの英吾塾が合併し、1870年にフェーリス和英女学校が出現したのを契機に女性教育が広く行われるようになった<sup>56</sup>。この宣教師の活動に敏感に反応したのがほかならぬ西洋思想の影響を強く受けていた知識人なのであった。彼らは「男尊女卑」に基づく、これまでの儒教式教育を修正することを迫られた<sup>57</sup>。きっかけとなったのは、明六社が発行した『明六雑誌』に、「女性たちの啓蒙と新たな価値観の成立が必要である」という記事であった<sup>58</sup>。この会は福沢諭吉（1835-1901）や森有礼（1847-1889）などの民権思想家らを中心に結成されたが、特に福沢諭吉は『学問のすすめ』の中で次のようなことを述べて注目を集めた。

先ず人間男女の間をもってこれを言わん。そもそも世に生れたる者は、男も人なり女も人なり。この世に欠くべからざる用をなすところをもって言えば、天下一日も男なかるべからずまた女なかるべからず。その功能如何にも同様なれども、ただその異なるところは、男は強く女は弱し。大の男の力にて女と闘わば必ずこれに勝つべし。即ちこれ男女の同じからざる所なり。今世間を見るに、力づくにて人の物を奪うか、または人を恥かしむる者あれば、これを罪人と名づけて刑にも行わる事あり。然るに家の内にては公然と人を恥かしめ、嘗てこれを咎むる者なきは何ぞや。「女大学」という書に、婦人に三従の道あり、稚き時は父母に従い、嫁いる時は夫に従い、老いては子に従うべしと言えり。稚き時に父母に従うは尤なれども、嫁して後に夫に従うとは如何にしてこれに従うことなるや、その従う様を問わざるべからず<sup>59</sup>。

つまり、福沢諭吉は女性の置かれている不平等な現実を批判し、女性の権利を強調した。これは、日本最初の男女平等思想として、女性の解放と新たな家庭の成立は文明開化の一つであり、それが欧米化につながると主張しているのであった。

韓国においても、日本や中国と同じく同様にキリスト教の伝来に伴って女性教育が行われるようになった。1884年に到来したキリスト教は教育

を中心に宣教活動を行っていたがために女性教育に積極的に関わり、1886年には朝鮮最初の近代式女学校である梨花学堂が設立された<sup>60</sup>。こうしたキリスト教の活動の影響を受けていた知識人たちの中には女性教育の必要性を強く意識する人々が現われた。その一人の徐載弼（1864-1951）は女性教育の必要性を、1898年に『独立新聞』の社説の中で次のように述べている。

女性を教育するようになれば、国家にとって非常に有益である。第一に、知恵のある婦人も国事を議論し、政治を進歩するであろうし、第二に、婚姻後に夫と家のことを互いに議論し家庭を築いていき、十分にその夫を助け、手紙も代筆して文書に記録し、暇なときに本を読み、学問を論じるので、家の中が和やかな雰囲気包まれ、夫婦仲睦まじく共に老いるだけでなく、最も仲のよい友となり、第三に、幼い子供たちが一〇歳までは常にその母親のもとで育ち、言行と情を学ぶので、その母に学があれば学校に通う前にはその母親が教えるため、養育する母親としてだけではなく、子供の師となるであろう。女に学があることが、どうして国家や国民に利することがないといえようか。（一八九八年九月十一日<sup>61</sup>）

福沢諭吉が男女平等に基づく女子教育を主張しているのに対して、徐載弼は多事多難たる時代だからこそ女性教育が必要であると訴えている。

このように、東アジアの女子教育はキリスト教宣教師らによって始められたのを当時、新文化運動を強く推し進めていた知識人たちが受け継いで発展させた。その結果、東アジアの女性たちは「女訓書」式女性教育から脱皮して近代的な教育を受けるようになった。

### 3. 新女性の誕生ともう一人の「悪女」たち

1872年、日本では学制が公布され、女性も男性と同じく近代的教育を受けることができた。時期はずれるが、韓国や中国でも近代的な女性教育が行われた。その結果、東アジアには新しい価値観を持った女性たちが現われ始めた。いわゆる「新

女性」である。

しかし、「新女性」と呼ばれる女性はいくまでも都会に住む一部の女性の話であって、地方農村の女性には縁の遠い話であった。彼女たちは相変わらず儒教規範が幅を利かせる時代に生きていた。そうした状態に危機感を抱いた一部の女性が立ち上がった。彼女たちは新しい教育を受けた第一世代として、雑誌などを作って女性を啓蒙する一方、真の女性解放を目指す運動を展開した。その代表的な「新女性」を二人紹介する。

まず、一人は日本初女性文芸雑誌として知られる平塚らいてう（1886-1971）である。彼女は女性の真の自由のために積極的な活動を行った明治の女性運動家である。堀場清子は、彼女について「この時期の女性を代表とする女性解放史に燦然と光を放つ最高の知性と才能がこの一巻きに結び合い、女性の可能性をのぼしうる新たな時代の到来を宣揚した。」と評価している<sup>61</sup>。平塚らいてうは、当時の女性たちが以前の女性のように従順な女性ではいられないことを認識させ、女性不平等に対して社会や男性を強く批判し、女性解放の道を固く提示している。それは、家父長制の良妻賢母思想への反発と対立、女性を個人の人間として見なす意志であり、女性の自覚を求める「新女性」であった。

一方、日本の植民地下で展開された韓国の女子教育は、欧米の近代的思想とそれに加え、日本の植民地下という特殊性を通じて新たな意識と自覚から生まれた。「新女性」の先頭に立った金一葉は、日本に留学中に日本女性の意識や思想、文学に大きな影響を受け、帰国後様々な活動を行った<sup>63</sup>。彼女は、自ら「新女子」と称しながら女性の地位を是正するために「新女子宣言」を行うなど、1910年代当時の韓国社会に新しい女性論争を始めた<sup>64</sup>。キム・キョンイルは、金一葉を「植民地という現実で男女平等と女性解放を主張し、日常生活で自分らの主張を実現しようとした」と評価している<sup>65</sup>が、ここで注目せねばならないことは、金一葉や平塚らいてうのような「新女性」の出現とその活動が、それまで儒教的ヒエラルキーの末端として悲惨な状態に置かれていた東アジアの女性たちをその呪縛から解放する契機となったと同時に、新たな問題をも浮き彫りにしたことだ。

その問題とは、近代的価値観を確立させた「新女性」たちが女性の自立や権利などを主張しても、女性の生きる場を家庭に留める伝統的な価値観が依然とし健在し、女性にはあくまでも儒教的世界観が求められていたことだ。それゆえに、自由恋愛や男女平等を主張する「新女性」の意識と行動は常に社会と対立し、様々な葛藤を生んだ。新聞や雑誌などジャーナリズムは、不倫や離婚、同棲を繰り返しながら、旧習にとらわれない生き方を実践する「新女性」を取り上げ、彼女たちを社会のルールをはみ出した女性、すなわち「悪女」として非難した。

ただし、彼女たちは近代以前のかつての「悪女」とは異なる特徴を持っていた。そんな彼女たちを、筆者はもう一人の「悪女」と言えるのではないかと考えるのである。

## おわりに

以上、本稿では東アジアの女性たちが近代的な価値観を持った新しい女性として社会的に認められていく背景について見てきた。その結果、東アジアの女性たちは儒教の呪縛から見事に脱皮し、一人の人間としての尊厳と地位を勝ち取った。しかし、その背後には大きな犠牲が伴った。『列女伝』が最後の巻に体制をはみ出した「悪女」たちを記すことによって「良妻」の価値を高めていたのはその端的な証拠である。『列女伝』の中の「悪女」だけではない。近代に入ってから日本や中国、韓国の文学作品には数多く「悪女」たちが描かれるようになったが、無論、彼女たちも単なる「悪女」ではない。近代化が推し進められていく過程の中で必然的に生まれた「悪女」にほかならなかったのである。このことからしても、東アジアの女性の近代化に「悪女」は欠かせない存在であったと言わざるを得ない。引き続き、近代以降、新たに注目されるようになった「悪女」について考察を進めたい。

<sup>1</sup> 田中貴子は、「悪女」は容貌が「悪い」女であると言い、本来の「悪女」の意味は「容貌の醜い女」であると記している。田中貴子（1992）『〈悪女〉論』紀伊国屋書店、6頁。しかし、西洋では「悪女（a wicked woman）」より、「ファム・ファタル（Femme Fatale）」の方が一般的であり、

「ファム・ファタル」とは、抵抗できない官能的な魅力と美しさで男性を誘惑し、致命的な不幸を招き、周囲の男性を破滅させる女性を指す。ファム・ファタルの本来辞書的な意味は、「魔性の女」、「運命の女」というフランス語であるが、19世紀ロマン主義の文学作品に「ファム・ファタル」が登場した以来、美術や演劇、映画などの多様なジャンルに拡散され、その意味も男性を破滅させる「悪女」「妖婦」に変形されたようである。バク・スンヒョン（2004）『絵画に表れたファム・ファタル研究』朝鮮大学校、14頁

<sup>2</sup> 韓国歴史研究会（2005）『朝鮮時代の人々はどのように暮らしたのか』青年社、27頁

<sup>3</sup> 小山静子（1991）『良妻賢母という規範』勁草書房、14-15頁

<sup>4</sup> チョン・ジェソ（2002）『東アジア女性の起源』梨花女子大学校出版部、17頁

<sup>5</sup> キム・オンスン（2005）『朝鮮時代女訓書に現れた女性の正体性』韓国中央研究院、51頁

<sup>6</sup> 竹内照夫（1971）『礼記』明治書院、30頁

<sup>7</sup> 同上、408-409頁

<sup>8</sup> 同上、410頁

<sup>9</sup> キム・オンスン、前掲載（註5）58-59頁

<sup>10</sup> チョン・ジェソ、前掲載（註4）18-19頁

<sup>11</sup> 劉向著、中島みどり翻（2001）『列女伝』平凡社、129-131頁

<sup>12</sup> 『女大学』は貝原益軒が著した「和俗童子訓」を元に作られたと見られ、1716年に刊行されている。遠藤織枝（1991）『言葉と女性』至文堂、28頁

<sup>13</sup> 渡辺友左（1985）『ことわざに表れた性差別』南雲堂、53頁

<sup>14</sup> 遠藤織枝、前掲載（註12）29頁

<sup>15</sup> イ・スグァン（2007）『朝鮮を揺るがした16恋愛事件』ダサンチョダン、176頁

<sup>16</sup> 趙恵貞著、春木育美翻（2002）『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局、31頁

<sup>17</sup> キム・ジョンクオン（1997）『名家の家訓』ミョンムンダン、209頁

<sup>18</sup> 韓元震著、ハン・ウォンジン翻（1998）『南塘集15巻』韓国文集叢刊、202頁

<sup>19</sup> 中江克己（2000）『世界の悪女・妖女辞典』東京堂出版、259頁

<sup>20</sup> 桐生操（2006）『世界悪女大全』春藝文庫、215-217頁

<sup>21</sup> 中江克己、前掲載（註19）263頁

<sup>22</sup> 村山吉廣（1997）『楊貴妃』中公新書、60頁

<sup>23</sup> 中江克己、前掲載（註19）263頁

<sup>24</sup> 張禧嬪は1961年の映画に登場して以降、2011年現在まで映画2作品、ドラマ6作品、合計8回も制作され、時代劇の主人公として最も高い人気を得た。チョン・ドゥヒ外（2004）『張禧嬪、時代劇の背反』ソナム、56-57頁

<sup>25</sup> 同上、136頁

<sup>26</sup> 同上、263-294頁

<sup>27</sup> ク・ソクボン（1995）『韓国史を揺るがした女性たち』ウルユ文化社、278頁

<sup>28</sup> 李在銑著、丁貴連外訳（2005）『韓国文学はどこから来たのか』白帝社、73頁

<sup>29</sup> チョン・ギョウボク外（1993）『金萬重文学研究』国学資料院

<sup>30</sup> 朝鮮王朝、第9代の成宗（1457-1494）の在位26年間の

記録。

- <sup>31</sup> ノ・フェチャン (2004) 『ノ・フェチャンと一緒に読む朝鮮王朝実録』 イルピッ、252 頁
- <sup>32</sup> イ・スグァン、前掲載 (註 15) 189 頁
- <sup>33</sup> ノ・フェチャン、前掲載 (註 31) 252 頁
- <sup>34</sup> 田中貴子、前掲載 (註 1) 17 頁。「find.2ch」のホームページ (<http://find.2ch.net/>) によると、2008 年 5 月「日本史における悪女」(3,000 人対象) の調査結果、「孝謙天皇(称徳天皇)」が 1 位を示している。
- <sup>35</sup> 永井路子 (2003) 『歴史をさわがせた女たち』 文春文庫、25 頁
- <sup>36</sup> 田中貴子、前掲載 (註 1) 17 頁
- <sup>37</sup> 同上、26 頁
- <sup>38</sup> 永井路子、前掲載 (註 35) 188 頁
- <sup>39</sup> 李在銑著、丁貴連外訳、前掲載 (註 28) 407 頁
- <sup>40</sup> 丁貴連 (2001) 「恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式 (上) 一国木田独歩「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」」『宇都宮大学国際学部研究論集第 12 号』宇都宮大学国際学部、3 頁
- <sup>41</sup> 丁貴連 (2005) 「一人称叙述形式と『新しい人間』の発見 一国木田独歩「春の鳥」と田榮澤「白痴か天才か」」『宇都宮大学国際学部研究論集 19 号』宇都宮大学国際学部、8 頁
- <sup>42</sup> 丁貴連 (2000) 「啓蒙とく文学」の間で—韓国近代文学における子供—『宇都宮大学国際学部研究論集第 9 号』宇都宮大学国際学部、7 頁
- <sup>43</sup> 中国女性史研究会編 (2004) 『中国女性の 100 年』青木書店、21-22 頁
- <sup>44</sup> 『毎日経済』1974 年 7 月 15 日付 (7 面)
- <sup>45</sup> 柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』岩波書店、89-91 頁
- <sup>46</sup> 丁貴連 (2002) 「恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式 (下) 一国木田独歩「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」」『宇都宮大学国際学部研究論集第 13 号』宇都宮大学国際学部、13 頁
- <sup>47</sup> 丸岡秀子 (1982) 『婦人思想形成史ノート』ドメス出版、93 頁
- <sup>48</sup> 「近來の恋愛問題」『東亜日報』1921 年 2 月 24 日付 (3 面)
- <sup>49</sup> イ・ジョンウォン (1982) 「日帝下韓国新女性に役割葛藤に関する研究」韓国精神文化研究院、
- <sup>50</sup> 「玄海灘激浪中に青年男女の情死」『東亜日報』1926 年 8 月 05 日付 (2 面)
- <sup>51</sup> ジョン・ボンクァン「尹心恵・金祐鎮「玄海灘情死ミステリー」」『新東亜 576 号』(2007 年 9 月 1 日) 523-525 頁
- <sup>52</sup> 同上、528 頁
- <sup>53</sup> 中国女性史研究会編、前掲載 (註 43) 12-13 頁
- <sup>54</sup> 関西中国女性史研究会編 (2005) 『中国女性史入門—女たちの今と昔』人文書院、40 頁
- <sup>55</sup> 陣燕燕 (2009) 「近代中国における「女国民」の誕生」人文社会科学研究第 19 号、233 頁
- <sup>56</sup> 田中寿美子編 (1968) 『近代日本の女性像』社会思想社、55-56 頁
- <sup>57</sup> 同上、52 頁
- <sup>58</sup> 山本藤枝 (1980) 『近代における女性の歴史』新人物往来社、42 頁
- <sup>59</sup> 福沢諭吉 (1872) 『学問のすすめ』岩波書店、77 頁
- <sup>60</sup> カン・ジュンマン (2007) 『韓国近代散策』人物と思想社、70 頁
- <sup>61</sup> 趙恵貞著、春木育美翻、前掲載 (註 16) 49 頁

<sup>62</sup> 堀場清子 (1988) 『青鞥の時代 平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、23 頁

<sup>63</sup> ムン・オクビョウ外 (2003) 『新女性』青年社、54-55 頁

<sup>64</sup> チェ・ヘシル (2000) 『新女性は何を夢見たのか』センガゲナム、199-201 頁

<sup>65</sup> キム・キョンイル (2004) 『女性の近代、近代の女性』ブルン歴史、48 頁

## 参考文献

〈日本語〉

李在銑著、丁貴連外訳 (2005) 『韓国文学はどこから来たのか』白帝社

遠藤織枝 (1991) 『言葉と女性』至文堂

小山静子 (1991) 『良妻賢母という規範』勁草書房

関西中国女性史研究会編 (2005) 『中国女性史入門—女たちの今と昔』人文書院

桐生操 (2006) 『世界悪女大全』春藝文庫

竹内照夫 (1971) 『礼記』明治書院

田中貴子 (1992) 『〈悪女〉論』紀伊国屋書店

田中寿美子編 (1968) 『近代日本の女性像』社会思想社

中国女性史研究会編 (2004) 『中国女性の 100 年』青木書店

趙恵貞著、春木育美翻 (2002) 『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局

永井路子 (2003) 『歴史をさわがせた女たち』文春文庫

中江克己 (2000) 『世界の悪女・妖女辞典』東京堂出版

福沢諭吉 (1872) 『学問のすすめ』岩波書店

堀場清子 (1988) 『青鞥の時代 平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書

丸岡秀子 (1982) 『婦人思想形成史ノート』ドメス出版

村山吉廣 (1997) 『楊貴妃』中公新書

柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』岩波書店

山本藤枝 (1980) 『近代における女性の歴史』新人物往来社

渡辺友左 (1985) 『ことわざに表れた性差別』南雲堂

## 〈韓国語〉

- イ・スグァン（2007）『朝鮮を揺るがした 16 恋愛事件』ダサンチョダン
- カン・ジュンマン（2007）『韓国近代散策』人物と思想社
- キム・キョンイル（2004）『女性の近代、近代の女性』プルン歴史
- キム・ジョンクォン（1997）『名家の家訓』ミョンムンダン
- ク・ソクボン（1995）『韓国史を揺るがした女性たち』ウルユ文化社
- ソン・インス（1977）『韓国女性教育史』延世大学出版部
- チェ・ヘシル（2000）『新女性は何を夢見たのか』センガゲナム
- チョン・ギウボク外（1993）『金萬重文学研究』国学資料院
- チョン・ジェソ（2002）『東アジア女性の起源』梨花女子大学校出版部
- チョン・ドゥヒ外（2004）『張禧嬪、時代劇の背反』ソナム
- ノ・フェチャン（2004）『ノ・フェチャンと一緒に読む朝鮮王朝実録』イルビッ
- 韓国歴史研究会（2005）『朝鮮時代の人々はどのように暮らしたのか』青年社
- 韓元震著、ハン・ウォンジン翻（1998）『南塘集 15 卷』韓国文集叢刊
- ムン・オクビョウ外（2003）『新女性』青年社

## 〈論文及び学術誌〉

- イ・ジョンウォン（1982）「日帝下韓国新女性に役割葛藤に関する研究」韓国精神文化研究院
- キム・オンスン（2005）「朝鮮時代女訓書に現れた女性の正体性」韓国中央研究院
- 丁貴連（2000）「啓蒙と＜文学＞の間で—韓国近代文学における子供」『宇都宮大学国際学部研究論集第 9 号』宇都宮大学国際学部
- 丁貴連（2001）「恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式（上）—国木田独歩「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」」『宇都宮大学国際学部研究論集第 12 号』宇都宮大学国際学部
- 丁貴連（2002）「恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式（下）—国木田独歩「おとづれ」

と李光洙「幼き友へ」』『宇都宮大学国際学部研究論集第 13 号』宇都宮大学国際学部

- 丁貴連（2005）「一人称叙述形式と『新しい人間』の発見—国木田独歩「春の鳥」と田榮澤「白痴か天才か」」『宇都宮大学国際学部研究論集 19 号』宇都宮大学国際学部
- 陣燕燕（2009）「近代中国における「女国民」の誕生」人文社会科学研究第 19 号
- パク・スンヒョン（2004）「絵画に表れたファム・ファタル研究」朝鮮大学校

## 〈その他 - 新聞、雑誌資料〉

- 『東亜日報』「近來の恋愛問題」1921 年 2 月 24 日付（3 面）
- 『東亜日報』「玄海灘激浪中に青年男女の情死」1926 年 8 月 05 日付（2 面）
- 『毎日経済』1974 年 7 月 15 日付（7 面）
- ジョン・ボンクァン「尹心恵・金祐鎮「玄海灘情死ミステリー」」『新東亜 576 号』2007 年 9 月 1 日

## 謝辞

この論文を書くにあたって、日ごろより暖かいご指導を頂き、完成まで励まして下さった指導教員の丁貴連先生に厚く御礼申し上げます。また、有益なご意見とご協力を頂いた中村真先生、松金公正先生、そして、丁研究室の皆様にもこの場を借りて心より感謝の意を表します。

# 동아시아의 근대와 여성, 그리고 「악녀」

## Women in the Modern East Asia, and "Femme Fatale "

김다희

(Kim Dahee)

### 〈요지〉

유교 이념에 얽매어 있던 동아시아의 여성들은 「양처」 혹은 「악처」라는 양자택일의 삶을 살아갈 수밖에 없었다. 대부분의 여성은 남성이 만들어낸 수많은 사회규범, 특히 부도(婦道)를 성실히 지켜 나가는 것으로 양처가 되려고 했다. 또한, 그러한 여성을 그 사회는 적극적으로 상찬하며, 이상적인 여성상으로서 미화했다.

하지만, 그러한 삶에 대해 의문을 품고, 저항한 사람도 적잖이 존재한다. 이른바「악녀」이다. 예를들면, 나라를 기울게 할 만큼 아름다웠다는 중국의 양귀비, 온갖 음모와 질투의 화신, 적극적으로 신분상승을 꾀했다던 한국 악녀의 대명사 장희빈, 남성 사회에서 정치적 능력을 발휘해 여걸이라 칭송되는 일본의 호조 마사코 등이 있다. 각 나라의 역사를 흔들어 놓았다던 이 악녀들은 미모와 권력, 그리고 비극적인 결말이라는 공통점이 있다. 근대 이전의 사회는 그러한 여성들을 엄격하게 처벌해서, 유교 규범에서 벗어난 것에 대한 본보기로 삼은 것이다. 즉, 「악녀」는 양처의 가치를 높이기 위하여 이용되었다고 말할 수 있다.

그런데, 근대화와 함께 들어 온 서양 문물, 특히, 자유 연애 사상에 입각한 새로운 결혼 문화를 습득하게 된 여성들은 이전과 다른 여성으로서의 삶을 알아가기 시작한다. 이제껏 『예기』나 『열녀전』 등의 서적으로 익히고 몸소 실천해왔던 남녀유별, 삼종지도, 칠거지악 등과는 전혀 다른 근대 교육을 받으면서, 남녀평등, 여성의 권리 등을 알아가게 된다. 동아시아의 여성들은 이제까지 억압되어있던 유교 규범으로부터 벗어나 남과 여가 아닌 한 사람의 인간이라는 것을 인식하게 되었다는 것이다. 이른바 「신여성」이 나타나게 되었다. 그리고, 그 여성들로 인하여 또 다른 「악녀」의 존재가 부각된다. 왜냐하면, 근대화와 더불어 변화한 사회임에도 불구하고 여전히 남아 있는 인습과 편견은 결코 간단히 사라지지 않았고, 「신여성」들의 적극적인 행동은 번번히 질타와 야유를 받았기 때문이다.

본고에서는 위와 같이 「악녀」로 불리어졌던 여성들이 시대적 상황에서 벗어나 인간으로서의 삶을 살아가려 했던 모습을 살펴보았다. 그리하여, 동아시아의 여성들이 근대적 가치관을 가진 여성으로서 사회적으로 인정되게 된 배경에는, 실은 유교 사회의 체제를 벗어난 적잖은 여성들, 즉, 「악녀」로 불리어졌던 여성들이 존재했었다는 것을 인정하지 않을 수 없었다.

(2011 年 6 月 1 日受理)